

8-1. 加藤家改易問題

(1) 清正は徳川家の有力な姻戚大名

清正死後の寛永9年(1632年)5月には、加藤家は改易になるわけですが、その理由として、加藤家は豊臣恩顧の大名だったから、徳川幕府が謀略により加藤家を改易したという説がまことしやかに言われています。しかし、加藤家が豊臣恩顧の大名と言えたのは、秀吉死去までのことであり、その後清正は、自ら家康の養女(従妹)を継室に迎え、長女あま姫を徳川四天王の1人榊原康政の嫡男康勝に、康勝死後は大坂城代阿部正次の嫡男正澄に、次女八十姫を家康の十男頼宣に嫁がせ、清正死去後は、嗣子忠廣に家康の三女振姫が会津藩主蒲生秀行に嫁ぎ産んだ琴姫を迎えるなど、徳川家および徳川有力大名と深い姻戚関係を結び、徳川の有力姻戚大名となっています。従って、徳川幕府が加藤家を豊臣恩顧の大名であるとして改易することは考えられません。加藤家改易の理由は、次の通りであり、徳川幕府としても苦渋の決断だったと思われます。

(2) 加藤家改易理由

次のようなことが重なり、家光への代替わりに当たり將軍の権威を確立したい家光が、徳川の有力姻戚大名でも容赦しないことを天下に知らしめるために行ったと考えられます。

(i) 忠廣嫡男光正の某書事件

第2代肥後藩主加藤忠廣の嫡男で家光の従甥でもある加藤光正が、江戸屋敷で、知り合いの2人の旗本を驚かそうとして戯れに將軍家光謀殺の連判状を書き、2人の旗本の屋敷にそっと届けておいたところ、そのうちの1人の旗本井上新左衛門が幕府職奉行に届け出て、幕府老中で吟味される問題となったこと。

(ii) 忠廣が徳川秀忠から徳川家光への將軍代替わりの時期に、幕府に届け出をせず側室とその子2名を国許に連れ帰ったことが、家光の威光を貶める行為ととられたこと。

(iii) 忠廣が徳川血筋の正室(秀忠の妹で会津藩主蒲生秀行の正室振姫の娘琴姫)に構わず、側室(生母の兄玉目丹波守の娘)を溺愛し、琴姫の不満が家光まで届いていたこと。

(iv) 江戸で忠廣の品行に悪評が立っていたばかりでなく、国元でも領民の不満が高まり、そのことが幕府の耳にも届いていたこと。

(v) 忠廣の後ろ盾だった前將軍秀忠が死去したこと {寛永9年(1632年)3月}。

(3) 改易理由の検証

(i) については、届け出を受けた老中松平信綱は、すぐ戯れの連判状と見破ったようです。なぜなら、作成者や連判者の氏名や花押、次の届け先などの記載がなく、実効性のある連判状の体裁をなしていなかったからです。しかし、將軍謀殺と書いてあるからには、作成者を探し当てる必要がありますが、糸口がありませんでした。あるとき、2年前に南町奉行所に届け出があった肥後藩の男の口述書が見つかり、その中に「若様の豊後守(光正)様から江戸城に討ち入るからお前が大将の1人を勤めよ、と言われたので、怖くなって逃げだして届け出た」という記述が見つかりました。届け出た男は頭が少しおかしい様子で、話の

辻褃も合っていなかったことから、南町奉行所では取り上げなかったということでした。これを見た松平綱信は、連判状を届けに来た男の顔を見ている旗本室賀源七郎の配下の者に肥後藩江戸屋敷を見張らせます。すると連判状を届けに来た男が出てきたのです。そこで光正の仕業とばれます。光正が旗本2名をからかうために作成したということでした。

(ii) については、忠廣は、江戸で生母正応院の姪（兄の肥後藩玉目丹波守の娘。法名は法乗院）を側室とし、1男1女を設けています。この当時、正室の琴姫（崇乗院）も江戸にいたようですが、関係は冷え切っていたようです。そして、寛永9年（1632年）3月大御所秀忠が亡くなって間もない時期に、忠廣は法乗院と子供2名を連れて熊本に帰ります。この頃妻子は江戸在住という制度は、制度化されていませんでしたし、1635年に制度化された際も継嗣と正室が江戸在住とされて、継嗣でない子と側室は、江戸在住とはなっていませんでした。従って、このことは、改易に処する重大な理由にはなりません。しかし、幕府に何の届もなく国許に連れ帰った行為が、「秀忠将軍のときには、そんなことはしなかつただろう？俺（家光）をなめているのか！」ととられたようです。

(iii) が、この改易の中心にあるように思われます。忠廣と琴姫の結婚は、秀忠主導で進められた政略結婚で、将軍血筋と地方大名という所謂格差婚でした。忠廣としては、将軍血筋の嫁は扱いつづかったのでしょうか。家康血筋の女性は、気が強い者が多く、琴姫の生母の振姫も、夫の蒲生秀行死去後会津藩の運営を巡り家老と対立し、家老が家康に切腹を命じられています。本件を知るにつけ、家康の長子信康が切腹し、正室築山殿が殺された事件が連想されます。あれは、信長の娘で信康の正室徳姫（岡崎城在住）と対立した築山殿が、在住の浜松城で信康に甲斐女を宛がい溺愛させ、怒った徳姫が信長に築山殿と信康が甲斐の武田と内通していると報告したことから起きた事件です。家康や信長の娘をみると、娘は父の言う通りに政略の道具として嫁ぐ代わりに、父は娘が粗末に扱われると容赦しないところがあります。本件でも、琴姫が家光に忠廣の自分に対する酷い扱いを報告していたと思われ、家光としては、将軍家を愚弄する行為という思いが積もっていたものと思われます。

琴姫は、加藤家改易後離縁したと思われませんが、徳川血筋の女性の場合、離縁しても又別の大名に嫁ぐのが通例です。しかし琴姫については、一度京都本圀寺にいた元清正正室清浄院を訪れたこと以外分かっていません。琴姫の存在が加藤家改易の原因の1つになったことは間違いなく、琴姫も加藤家改易の責任を取らされたのではないのでしょうか。

(iv) については、江戸での品行の悪さの具体例は分かっていませんが、領国における領民の不満は、容易に想像できます。清正死去後肥後藩の財政は、逼迫を極めたと思われます。先ず、巨大な熊本城の維持費が財政を圧迫します。豊前小倉藩主細川忠利は層塔型のシンプルな小倉城を築き、筑前福岡藩主黒田長政は、福岡城の天守閣を壊し（最初から築かなかったとの説もあります）、維持費の少ない城としました。一方熊本城は、朝鮮出兵の報復として明・朝鮮軍が日本に侵攻してくる場合に備えて築かれたと思われ、蔚山城籠城戦の経験を基に幾重にも備えがある難攻不落の要塞のままでした。この維持費は大変なもので、54万石程度の石高で維持できず、75万石程度の石高が必要となったと思われます。清正の場合、

その不足分を補うため、河川改修や新田開発で生産高を増やし、実石高を75万石程度まで増加させました。そして、花畑屋敷や本丸御殿の普請費用や天下普請の費用、あま姫の嫁入り費用などの追加費用は、朱印船貿易の利益で賄ったものと思われます。しかし、清正死去後、大坂城普請、江戸屋敷の拡張、江戸参勤などが新たに加わり、支出が大幅に増加したにも関わらず、家臣団の内紛や統治能力の欠如などにより新田開発は進まず、実石高はあまり増えなかったうえに、朱印船貿易は禁止されたことから（できる者もいなかったでしょう）、藩の収支は大幅な赤字に転落したと思われます。それに加え、1619年に八代で、1625年に熊本で巨大な地震が発生し、麦島城は倒壊し、熊本城は破損する大きな被害が発生しました。同時に海岸や河川の堤防や土手が決壊・破損し、田畑なども棄損したと思われ、米などの生産量が相当減少した中で、これらの復興費用が必要となりました。2016年の熊本地震後の復興を考えてみてください。当時の肥後藩の状況は、復興に国費が投入されず、独自の資金で復興していかなければならない熊本県の状況です。地震により、清正時代実石高75万石程度まで増加した生産量は減少する一方、膨大な復興費用が発生したと思われます。肥後藩は、1624年に検地を実施し、実石高を96万石に設定したようですが、この石高は、1619年の八代地震の復興のために膨らんだ藩の支出を賄うために実際より大幅に水増しして設定されていると思われます。その後1625年には熊本地震が発生し、熊本城が破損するなどの被害が発生していますので、領民には加重な年貢だけでなく、八代城の築城や熊本城の修復、地震で壊れた堤防や河川の修復などの為、加重な労役が課され続けたと思われます。その結果、忠廣の執政に対する領民の不満は、幕府に届くくらいまで高まっていたことが予想されます。

(v)については、秀忠は、忠の1字を忠廣に与え、妹の娘を嫁がせている関係から、忠廣を頻繁に江戸城に呼ぶなど可愛がっていたようです。忠廣が家光と将軍を争った忠長と仲が良かったのも、秀忠が家光よりも忠長を可愛がっていたことと関係があると思われます。そしてこれも家光の不興を買っていたでしょう。光正某書事件が秀忠生存中に起きていれば、秀忠のとりなしにより、加藤家改易はなかったと思われます。この問題が起きた時期が秀忠死去後だったということも不運でした。

(4) 幕府体制を守るための見せしめ改易

本件については、家光および幕府の重臣達は、清正の次女八十姫の夫である紀州藩主徳川頼宣と3度にわたり相談するなど、慎重に処分を検討したことが伺えます。八十姫は、忠廣への処分言い渡し前に、夫頼宣から処分を聞かされ、徳川の為と受入れるしかなかったでしょう。飛騨配流となった光正は、徳川血筋であり、家光の偏諱を賜り松平姓を名乗ることが許されていたことから、徳川家としても断腸の思いでの決定であったと思われます。即ち、加藤家改易は、豊臣恩顧の大家潰しから行われたものではなく、徳川幕府体制を守るためには有力姻戚大名でも容赦しないことを全国に知らしめるために行われたものだったのです。

(済みません。この見解は間違っていました。加藤家改易の本当の理由は別途ありました。

「加藤家改易は徳川頼宜を抑え込むため」をお読みください。）